

解説系男子の受難

ブルーな気持ちのハシビロコウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファンタジー要素のある世界に転生し、親友に恋のキューピッドを頼まれた主人公が前世の記憶と共に頑張る話。

目次

解説系男子の受難

1

二話

28

解説系男子の受難

ここは、とある国の魔術学院。

「頼む！ 協力してくれ！」

——いつもの昼休憩、いつもの三人で集まっていたとき。

全ては、この頭を下げた親友の一言から始まった。

俺の親友はスポーツ万能、学勉のほうは微妙だがそれを補えるほどの厚い人望がある男だ。

俺みたいな地味な奴とも仲良くしてくれているのは正直に有り難いと思っっている。

ちなみに名前はアルサーノという、愛称はアルだ。

顔は当然、名前や性格もイケメンなのだ、畜生。

「お断りよ」

すると、俺の隣にいた少女が呆れたように肩を竦める。

「ロレン、受けるまでもないわ。アルがこういう風に頼むときは、大体ロクでもない話なのよ」

そう言ったのはアルの幼馴染のセナだ。

アル同様に整った顔立ちの彼女、基本口は悪くて誤解されやすいけど根は良い子だ。

アルとは小さい頃から一緒なので、大体こういったお願い事もされてきたのだろう。

「ま。まあまあセナ、アルがそこまで言うんだからよほどの理由があるんじゃないか？」

しかし男女ではわかり合えない所もあるだろうし、話くらいは聞くべきだと思う。

「どうせ下らないに決まってるわよ……でも、まあ一応聞くけど、理由ってなに？」

訝しむ視線を向けられると、頭を下げていたアルが気恥ずかしそうに顔をあげた。

「それなんだけど……先日特待生がこの学院に来ただろ？」

「ああ。来たな、时期的にも珍しいしクラスでも話題になってた」

「それで？ そんな特待生がどうしたのよ？」

アルは決心したようにすう、と息を吸う。

「——彼女に一目惚れして昨日告白したら『私強い人にしか興味無いんです』って言われたからすぐに決闘を申し込んだんだよ」

「……既に色々ツツコミ入れたいけど、それで？」

「俺は彼女との決闘に勝ちたい……だが、もし勝てたとしてもそれだけじゃ振り向いてくれない気がするんだ。彼女はもつと先を見ている……俺なんか見ていない、そんな気がするんだ」

「……で？」

「だからさ、俺思ったんだよ——ならば勝って、しかもより明確に俺の強さをアピール出来さえすれば。それだけやれば彼女も振り向いてくれるんじゃないかって！」

「バカなの？」

「——ひどくないか二人とも？」

……要するに何故が強さに拘っている特待生に恋したから、勝つだけでなくさらにアピールがしたいと。

いや、うん。理にかなってる……のかな？

随分と大胆に出たのは間違いないけど。

セナから『な？ 言つたる？』的な目が痛い。

少なくともロクでもある話ではなかった。

「アル。つまりは、俺達にその恋のアシストしてほしいんだな？」

「そうなんだよ、頼む！」

「……全く、思った以上に呆れたわ」

流れを聞いたセナは、大きく息を吐く。

「アル。アンタの努力を知ってる人はちゃんと理解してくれているわ、それでいいじゃない？ それが私達だけじゃなくて、今じゃなくてもその子も加わるかもしれないのよ？ 急ぐ必要なんてない、何が不満なのかわからないわね」

「ぐっ……」

おおっと手厳しいなセナさん。ちゃっかりフォローいれているのは流石だけだね。

するとセナに断られたからか、今度は俺の方にアルの視線が来る。

「ロレン、駄目か？」

捨てられそうな子犬のような目で見てきやがって。

そんな目で見ても、俺の言うことは決まっている。

「……………いいかアル、物事には順序つてもものがあるんだ。勉強だつてそう、ゲームだつてそう、そして恋愛だつてそうなんだ」

「あ、ああ」

「恋愛経験の少ない俺でも、アルの行動はいくらなんでも早計つてわかるぜ？ 本来ならばもう少し考えるべきだった」

うんうんと、セナは頷く。

「いいか？ アル。お前がこれからやることは一つだ」

俺は立ち上がり、二人に背中を向けた。

「……………初めての彼女とのデートプランを用意をしとくんだな！」

「……………はい？」

「!!」

たった今日を丸くしたセナは、きつと正しい。

セナの言葉だつて、きつと正しい。

だが、駄目なのだ、その言葉は。

一度好きな人が出来たら直ぐに好きになってほしい、いてもたつてもいられない。だが恥ずかしくて声を掛けれないつてのが男心つてやつよ。

——そして悶々としている内に卒業まで声をかけるどころか挨拶すら出来ないのが俺みたいなやつよ。

泣けるね全く。

だが、アルは違う。

勇気を出して言ったのだ。

それはきつと誇らしいことで、とても素晴らしいことなのだろう。「それになにより、アルは親友だ。その恋路を応援しない理由がないだろう？」

「つ……………!! ロレン、心の友よ！」

「心の友と書いて心友しんゆうと読むのさ。ハツハツハ！」

感激のあまりガバリと後ろから俺に抱き付いてこようとするアル。それを見ずにステップで華麗に避ける俺。

——いくら親友といっても野郎のハグはお断りだぜ。それは未来にできる彼女に取っておいておくんだな！

しかし、心の友かあ。

困っているならば、手伝うのが友ってやつだろ？

昔の、ボツチの時の俺は手を貸してくれる存在がいなかった……そして、そんな俺とは既に決別したんだ！

「ちなみになんか具体的な案とかある？」

「ない！」

「清々しいことに無計画で無茶振りしてきやがったな！ 上等だ今度飯奢れよ!!」

「はあ……もう知らないから、勝手にしなさいよバカコンビ」

はしやぐ俺達を見てセナはそう吐き捨て、やれやれと立ち去っていく。

一見すれば呆れられた様にも見えるこの光景。

こういう似た場面は多々あったが、しかしそれでもちやっかり協力してくれたりするのがセナである。

そんな良い奴なのを俺達は知っている。多分素直だったら波のよくな勢いで告白されているだろう。

まあ、ツンデレさんなのだ。今度動物のぬいぐるみをプレゼントしよう。

可愛いものが好きなのはギャップというやつだね。

——というわけ背景により、俺はウサギに似た動物のぬいぐるみを片手に親友の恋の手助けをする事にしたのだが。問題は山積みである。

ぶつちやけなくても俺は恋を知らない上に平々凡々な一般人だ。

恋愛なんてサッパリ、だが力になりたい。

——おっと。

ここで遅れたが俺の紹介をしよう。

俺の名前はロレン、ロレン・オリマー。

この魔術学院に通う一般生徒だ。

だがそんな平凡な俺には、唯一周囲の人間にはないある秘密がある。

いわゆる『前世の記憶』というやつだ。

つまりは転生者というやつであり、人生経験は同級生と比べればそれなりに豊かである。

まあ前世は魔術というファンタジーとは無縁の世界だったし、大した経験もなかったから今世で得したこと殆んどないけどな、ハッハッハ………ハア（悲）。

——知らないよ魔物とか、元々農民だったのよ俺？

魔術の才能があるとか言われておだてられてあれよあれよとこの学院に来ていたし………ちなみに初めての魔物はアルと出会ったときに遭遇したんだけど。

昔は魔王とかもいて人類と争っていたらしいしね。

さて話は戻り、そんな俺がいくら親友の頼みだからと無策に安請合いすると思うか——しないんだなこれが。

ちやーんと策はある、正直諦めかけていたこの俺のアドバンテージを生かすときが来たんだ。

——俺の親友は主人公感が凄い。

人柄がよくて気遣いができて、イケメンで中性的な顔立ちときたもんだ。時々一人で突っ走ったり優しさに不器用な所もあるがそれはまあギャップというか、愛嬌という奴だろう。

完璧すぎても近寄りにくくなるだけだしね。

そして様々な属性魔術が世界を支配するファンタジーな世界において、アルは全属性に適性がある。これは数十年に一人程の才能だ。

更に親は英雄と讃えられ、俺とセナしか知らないが普段手袋で隠しているアルの右手には幾何学的な刺青がある。

物心ついた頃にはあって、親も教えてくれないらしい。

そして今、中々に珍しいタイミングで同年代の美少女と噂されている特待生が入学してきた。そして彼女に恋をしたと。

……これは、きつとあれだろうか？

漫画でいうところのこれは物語の始まりのきっかけであり、実は特待生とは過去に会っていて、今回の決闘を通じて思い出して運命的な出会いを果たしワフワフな関係になって、ツンデレな幼馴染との修羅場を乗り越えつつ過去に因縁のある強大な敵——どうせ復活する魔王へと立ち向かっていくのだろう（早口且つ適当）

……いや、まあ言わないけどね。

元々俺があのだと仲良くなったのも完全なる偶然だし。偶然同行して学院に行く道中に魔物に遭ったその拍子で手袋取れて、話している内に気が付いたら打ち解けて仲良くなったりしたのだから。

俺は最初こそイケメンで美人な幼馴染とか超羨ましいなあと思っただけ、話す内にどんどんその主人公感に気づいていった。

だからアルには悪いけど、これでフラグもなく平凡に学院生活とかもういつそ詐欺と言っただけいいと思うんだ。

申し訳ないけど絶対にアルの人生に大きな壁は人一倍あると思うんだよ、卒業までには前例のない魔術とかを使って、多分格好良さに嫉妬した比較的仲の良い知り合いの誰かは闇堕ちする筈なんだよ（やはり適当）

親友として出来る限りの障害は取り除こうとは思っているが、流石に限界はある。過去の血の争いとか言われたら俺どうしようもないもの。弱いし。

——話が反れた、とにかくだ。

しかしそんな親友の恋の行方、応援しないわけにはいかないだろう？ せっかくの学生でしか味わえない青春だからな！ 目一杯楽しませてあげたいというわけだ。

さて。

前世の記憶をもつ俺には、とある知識がある。

記憶では物語の主人公の親友、もといそういう奴等に限ってとあるスキルがあるのだ。

それは——『解説ポジション』である。

解説ポジションとは、まあその名前の通りだ。

決闘している時に「あ、あれは……!?!」的な感じのリアクションをしながら、その魔術の効果や威力を解説する人間。

名前は勝手に付けた。

ちなみにレベルが高くなると「ほう、まだここも捨てたもんじゃねえな——」とか意味深な事言つて、詮索される前にほくそ笑んで帰る高等テクニックをする者もいる。

なんなら主人公と付き合いのある異性の好感度とか私生活とかも細かく知っていたりする強者もいる、業界では常識だな。ストーリーカーとは違うらしい。

誰でも簡単に出来るように見えるかもしれないが、全くそんな事はない。

説明するために必要な情報と知識、そしてその情報を得るために必要なコミュニケーション能力と言うタイミンングを見計らう洞察力。

——まあ、前世から俺はバカな上に、この世界の友達もあの二人しかいないんだが。

つまり俺はまだレベル1（推定数）というかマイナス値。

これは誰かと誰かが付き合っているという浮わついた話が一足遅れて自分の耳に届くレベルだ。

なんだこの基準（自問）

つまり、今の俺は詰みかけている。

だがまだ決闘には数週間ある、親友の為に地道にレベリングするとしよう。

……にしても羨ましいなあ、俺も恋愛したいなあ。

だが、今は友情を優先するぜ!

見ている親友! 俺がお前の恋のキューピッドになってやるから

な!!

「……………フン、ぬいぐるみに罪はないからね。せいぜい大切にしてあげるわよ——な、何ニヤニヤしてんのよ? 気持ち悪いそんなんだから彼女出来ないの——ご、ごめんなさい。流石に泣くことないでしょう? ほら。凄く嬉しかったから、だからすこーしだけなら手伝ってあげるから、ね?」

泣いてねえし、彼女出来ないの気にしてねえし。

——俺は努力した。

しかし前世の経験があっても、この世界における情報は少ない。それなりにしか授業を受けていない俺はそれなりにしか知らないのだ。ファンタジーなんだなあ位の感想しか抱いていなかった。

だからまず俺は勉強することにしたんだ。決闘までの日時までに授業を真面目に受けて質問しまくり、図書室で書物という書物を読み漁った。

「おつロレン・オリマー。最近質問も増えてよく頑張ってるな、成績も相当上がってるし嬉しいぞ。だがまあ無理ない程度に励めよ!」

と先生に褒められたが、今はそれどころじゃない!

親友が決闘に勝つために弱点(ついでに好みとか)を知るべく特待生について情報収集するために慣れないながらも人と話した。

こんなスパイのような真似はアルは好きじゃないだろうし、負けるとは思っていないが万が一がある。

決闘に負けたりしたら本末転倒だからな。

「おつすロレン! 帰りに飯食いにも行こうぜ!」

「ロレン君ってずっとあの二人というイメージしかなかったけど、話すと意外に面白いんだね」

なんて言われて情報があつちから来るようにもなった。

気兼ね無く話せる奴も増えたが今はそれどころじゃあないんだ!

「——最近付き合い悪いのね？　ま、別にいいのよ？　どこで何してようと勝手だからね？　友達が多いのは良いことだし？　私は気にしてませんけど？　でも昔からの関係を疎かにするってどうなのかしらねえ？」

なんかセナに睨まれた。

……今はそれどころじゃないよな（疑問）

苦労はあつたが、ここ最近で一番驚いた事がある。

「すいません。ロレン・オリマーさんですね？」

——なんと本人が来ました。

容姿はかなり整っていてモテそうだが、時期が時期である特待生なこともあつて、正直あまりクラスメイトと馴染めていない。

ということとはつまり、有益な情報が来ないということだ。

それは困る。情報の為に四六時中尾いていくとか流星にストーリー紛いのことをする気はない、既にグレーゾーンな気もしているのだから。

「最近私の事を嗅ぎ回っていると聞きましたか？」

「うん？　ああ、そのこと」

「まったく、この学院は変な人が多いのですか？　初日に告白してくる人といい、何でもなし私を嗅ぎ回るような行為をする人といい——」

何か言っているが、既に俺は自分の世界に入っていた。

この俺に、天才的な発想が飛び込んでいたからだ。

……思えば軽く感覚が麻痺していたとも思えるけど。

色々回りくどい事をしてきたが、よくよく考えれば彼女は特待生、情報など集まらない方が普通なのだ。

それに根拠や裏がとれているかどうかなど尚更である。

入って来た情報だつて時々物憂げな顔をする事だつたり、たまに『……父さん』つて言ってる事だつたりで、なんかフラグしか立ってない上に有益な情報ではない。

ならば、と。ロレンは考えた。

——もういつそ直接聞いた方が早くね？ と。

「そりや聞くよ、お前の事が知りたいもん」

しかし嘘をつける器用さはないので、素直に伝えることにした。

「——はい？」

「好みの男性のタイプとか教えてくれたりする？ 体格とか性格と

か、髪型とかさ」

「好み？ え？ ……はああああ……!?!」

「ついでに得意な魔術系統だつたり戦闘スタイルも——あれ？ いない」

速攻で逃げられた。悲しい。

まあそりや初対面で、しかも決闘相手と仲良いとは話したくないわな。

やはり諦めて地道に情報収集かなあ、しんどい。

……余談だが先程のやりとりをみていたらしい、廊下で会ったセナが般若になっていた。怖くて逃げた。

女心つて難しいね（確信）。

……さて。そんなこんなで多難ではあったものの俺は着実に、胸を張って解説できる自信をつけた。

残念ながら弱点の方は聞けなかったので自分を棚に上げてアルの個癖を指摘する事くらいしかできなかつたが、まあ仕方無い。

そして今、決闘前日を迎えたのだ！

俺の努力はこの為にあつた！ 既に俺の親友の戦闘スタイルも把握済み、これならば戦闘中の解説も大丈夫だろう。

俺が事あるごとに凄さアピールをすれば良い。

ちなみにアルの実力は教師からも太鼓判を押されるレベルで、わりと決闘に教師陣も乗り気だから適当な事は言えない分更に頑張った。これがもしフイクシ^二ン^次元ならばアルが負けそうになったりしたら、準ラスボスな敵が来たりして因縁つけられてうやむやになるかもな！ ハツハツハななにそれやだ怖い。巻き添えくらいそう。

——ま、これで特待生もアルの凄さにメロメロだな！ 多分！

つーわけで、現在に至ります。

ちなみにこの学院の創設者による特殊な結界内の戦闘なので、もし致死レベルの魔術を受けても問題ない。

なんでも特殊な魔術師と、国の許可がないと出来ない仕様らしく国にも数えるほどしかないらしい。便利だなあ。

二人の戦闘は白熱していた。

杖をもった二人は距離を取り、もしくはき

「——喰らえ！ フレイムトルネード！」

「出たなフレイムトルネード!! 風と火の複合された魔術！ 熱を纏った風の刃となって相手に襲い掛かる！」

「アイスブリザード！」

「なに……あれはまさか氷と風の複合魔術だと!? 千人に一人と言われた才能をアルだけでなく特待生をも持つだなんて、何者なんだあの生徒は！」

——何者なんだろうね、本当。

決闘を見たり、噂を聞いたりすればあの特待生の謎が増える一方だ。

基本無口だけどたまに「……父さん、母さん」と呟くらしいし。

アルの属性魔術を冷静に対処している、しかも複合魔術も会得しているときた。

最近目も合わせてくれないから直接聞けないし、聞くことも無いだ

ろうけど一般の生徒では間違いないな。

多分あの子も宿命背負ってるな（失礼）

俺は今どこって？ 俺は観客席から魔術に適性のない人でも使える拡声魔術道具——まあ、マイクなんだけど。それを片手に叫んでいる。

今は戦闘が始まって皆も慣れたけど、戦闘開始時なんて皆からの『え、何してんのお前？』的な目が凄かった。メンタル強くないんだからやめてほしい。

「これは見逃せない展開だぜ、なあ実況のセナさん」

そしてすかさず隣に座っていたセナにもう一つのマイクを手渡した。

「私いつ実況になったのよ？ というかもう一つあったのね……：うーん、足運びや動きだけを見るに二人とも魔術だけじゃなくて体術もある程度はかじってるみたいね——誤解されやすいけど魔術師にもある程度の体力は必要だし、学生の今はいいけど近接もある程度は出来ないよ、懐に來られたときに話にならないからね。学院生活が終わった先を見越した経験が生かされている感じね」

周囲から、おお。と感嘆の聲が漏れる中で、セナは怪訝な顔をした。「ねえロレン、実況ってこういうので大丈夫なの？ 少し恥ずかしかったんだけど」

「あー……：なんかごめん。本当に実況してくれるとは思ってなかった」

「焼くわよっ」

「まあまあ。あ、ジュース飲む？ 柑橘ジュースでいいよな、好きだろ？」

「……：……バカ」

そっぽ向かれた、まあそりやそうか。

あんまり気にしてないみたいだしよしとしよう、本気で怒ったらなんかオーラ出てくるのを最近になって知ったし。

俺が二人分の飲み物を頼んだちようどその後、アルが杖を真上に

掲げて叫んだ。

「喰らえ……!! 『アンデルセン・リクオート』!」

「っ! アクアシールド!」

すかさず特待生は防御の魔術を行使して備える。

しかし全員の注目は、その特待生の流れるような一連の動作ではなく、アルの魔術に向かった。

『なに? アンデルセン・リクオートだつて!?!』

『アンドルト・リクルート!?!』

『まさかアンルセン・リクートを出すとはな……』

ストローの付いたジューズを片手に持ったセナが、少し戸惑いながらアルの魔術に感心する周囲を見て、最後に俺に視線を移した。

「……………ね、ねえロレン」

「んー?」

「その『なんたら・リクオート』つて……………なに? 既存の魔術ではないわよね? さつきからアルも特待生もなにもしてないし、何が起きているの?」

「———まだまだだな、セナ」

「その顔……………まさか、知っているのね?」

怪訝な顔をするセナにそう言つてやり、俺はほくそ笑んだ。

———なんだろね?

いや本当に『なんたら・リクオート』つて何?

聞いたことねえよ言えるわけなくね? 復唱できないもん。

今の今まで見たことないし、多分だけど急に作りおったよあの親友。

その本人も警戒する特待生を目の前にしながら杖掲げたまま動かないしき。何属性だよ? 火も水も名前に入っていないよなんだよりクオートつて、投資か?

……………恋する俺の親友よ、今回ばかりはすまないが助力できないぞ。

まあだけど、周りの皆知ってるっぽいし解説する必要はなさそうだな。

多分、ほぼ全員名前言えてないけど。

『……………』

「ん？」

ここまで来て、俺はあることに気付く。

なんか、俺に視線が集まってきてない？

え？ なんですか？ 僕にできることなんて無いですよ？ その

場でジャンプしても何の音もしませんよ？

——ひよつとして解説しろと？

え、皆知ってるんじゃないの？

いや、まあ確かに図書館の本を図書委員がドン引きする勢いで読み漁った俺が知らないのに皆知っているのも少し不思議だったけど。

「……………」

『……………』

俺に向けられた視線が未だに反られる気配すらないのを見てなんとなくだが、俺は察した。

——さては、こやつら知ったかぶりしたな？

知らないのに知ってますよ的な感じでリアクションしたんだな？

おおむね俺が解説するから平気だと踏んだんだろ？

なんだなんだ、実は皆知っているのに俺知らなくてほんのちよつとショックだったけど、そういう訳じゃなかったんだな。

ふう、やれやれ。知識勝負ならば先ずは図書委員から『アイツ滅茶苦茶来るんですけど、怖くない？』と噂になるくらいに本の虫になつてからにしたまえよ諸君？

全く仕方無いクラスメイト達だ、しかしここは俺の責任も無い気がしないでもない、その尻を拭うとしよう。

「……………ねえロレン、今わかりやすく調子に乗ってない？」

「何の話だいセナさん？ 僕は調子になんか乗ってないよ。ただ勉強不足の無知な皆にこのスーパー勉強マスターの僕がアルの凄さを伝えてあげたいだけさっ」

「——へえ。先に忠告しておくけど、そういうときのロレンって今までロクな目に遭ってないわよ？ あと素直に気持ち悪い」

ほほう、何をいっておられるんだこの人は。

調子に乗るだつて？ そんなことはない。強いて言うならば知つたかぶりをして調子に乗つたのは周囲の方だろう——気持ち悪いのはシヨック。

だが俺はそれを頑張つて弁解させようというのだから、良心の塊み
たいなものだろ？

でも、まあちよつと待つてほしい。

何か起きないと解説のしようがないから。

まだ杖を掲げたアルから何も起きてないから。

.....

.....

.....

.....

.....

∴ (´・ω・`)?

——なんにも起きないな。

え？ もしかして俺が見えてないだけ？

視認しにくい風系統の魔術の応用とかか？ いやそれなら動力源の魔力に動きがあるよな？ 身体強化ならば体に薄い魔力を纏うし、そもそもそんな高等技術なんてアルといえどそうそう出来るわけもない。

まさかの覚醒イベント的なアレか？

でもなにかに覚醒したにしても動きなくね。
十秒くらい経ったと思うんだけど、ぶつちやけて隙だらけなんだけ
ど俺の親友。

ということとは………どういうことだ？

もしてかしてあれ、マジになにもしてないんじゃないやね。

——なんか顔赤くなってね？ 俺の親友。

恥ずかしがってね？ なんか小さく震えてね？

………まさか失敗したのかな？

あ、アルが今凄い気まずそうに俺の方をチラッて見た。
うん。確定だわこれ。

——少し魔術について解説しよう。

基本、魔術の発現は詠唱を用いるのだが短縮ないし簡略して発動させるか、無詠唱の魔術の使用する。それがさつき二人のやっていた魔術名だけで発動させるものだ。

己のイメージと言葉によって魔術を発言させる。

さらっとやってるけど、高等な技術と才能が必要だ。

学院でも出来る者は少ないだろう。ちなみに俺は出来ないけどセナはできる。

だが、難しい理論を抜いて言うとか詠唱を間違えたりイメージが曖昧では発動しない。これは魔術を使う身から見ればかなり初歩的なミスだ。

優等生のアルならほぼ間違いなくしないだろう。

でも多分、今回ののはそれだ。

………あれかな、模擬とは言っても戦闘でテンション上がり過ぎちやったかな？ 好きな人との今後も関わってくるから尚更に。あ
るよね考えすぎて空回りすること。

さて、どうしよう。

今から別の魔術を使ってもなんとなく『さつきのなんだったんだ？』って気になるし、それに俺への視線も痛い。

つまり俺は遺恨を残さずにアルの失敗をどうにか揉み消す必要があるわけだ。

中々に責任重大である、解説って大変だな。

「アンシエルン・オクレーヨは……………時間稼ぎか」
『！』

——だが、こういつたピンチならば想定内！

ロクな目にあわないだと？ そんなことはないんだよ。

「アルは今まで派手な動きをすることで魔術を発動させていた……………今回のそれは違う。敢えてアルは先程と同様に大きく動き、聞いたことがないような魔術を名乗ることで相手の警戒を誘い、その間に一度自分の息や体勢を整え、さらに防御の魔術を行使した相手を疲労させたんだ……………！」

『そ、そうだったのか!! 知ってたけどな!』

『流石アルサーノだぜ! 俺は理解していたぜ!』

『理屈では簡単だが、それを戦闘の場で堂々とやるなんてな、肝が据わってやがる。まあ、マブの俺は通じあっていたけどよ』

『……………やるじゃねえか、まあわかってたけどよ?』

——おい誰だアルとマブって言ったやつ。

視線がどんだんアル達の方に向かっていくので、俺はホツとした。

中々に強引だがまあ結果オーライとしましょうよ。

前世の俺ならばなにこれ? って硬直したかもしれないがな、今は

一皮も二皮も剥けているんだぜ。

アルも一瞬凄く嬉しそうな顔をしていたし。

決闘も再開した、次はしくじるんじゃないぞアル。

……………うん、だからさ? やめてよセナさん。

長い付き合いだから、なんとなく察したのはわかったから。

なんかそんな、可哀想な奴等を見る目で見ないでよ。

俺を巻き込まないでよ(切実)

「あら、楽しそうね？ 私も混ぜてくれるかしら？」
『っ』

——観客全員が一瞬、凍りついたかのように固まった。
黒いローブを纏った長い黒髪の女性、彼女はどこか禍々しさを放つ杖を片手に、妖艶な笑みで周囲を見渡していた。

「この結界って相当に価値があるのよ？ 入るのは容易で、しかし内からでも外からでも結界を通した魔術ならばまるで空間を隔絶したかのように防ぐ……」

そう言つて、彼女は結界の中から観客へと魔術を放つ。

悲鳴が上がったが、結界の外にいたクラスメイト達へその魔術は届かない。

「——完全なる無詠唱の魔術、だと？」

「それに、あんな威力を……！」

——空気を読んで言わないが、魔術はある練度まで達すると念じるだけで行使できるようになるらしい。

しかしそんなものは世界でも一握りで、普通なら会うことすら無く人生を終えるものが多いだろう。

しかしそれをなんてことないように。まるで出来るのが当たり前と言わんばかりの表情で結界を見ていた彼女は鼻を鳴らした。

「まあ……こちらからも攻撃できないのは中々に痛いけど、最強の盾と言えるわね——もしこれを改良出来れば、無敵の要塞が出来あがるのは間違いないか」

そう、一人ごちり。

ニタリと彼女は周囲を見て笑った。

「——ついでに、将来邪魔になりそうな若芽を潰そうかしら？」
『っ』

二人は咄嗟に杖の先を彼女に向けた。

既に決闘なんて話じゃない。

結界の中に入ったことすら誰も気づかなかった

「フン、無駄よ？ 少し見てたけど、いくら強くても所詮学生の枠は越えられてないわ」

確かに、実力の差は最初の攻撃で歴然としていた。

二人もそれをわかっているのか、苦悶の表情を漏らす。

そう言っつて、魔女は禍々しい杖を振り上げた。

「強いと言うのはね———こういうことを言うのよ!!」

「マズイ! 逃げろアル!!」

「っ!」

すると、魔女と呼ばれた彼女が何故かピタリと動きを止めた。

———なんだ? 何かわからないがチャンスだ!

「おいアル! 今がチャンスだ!! 逃げ……うん?」

そこで、遅かったが俺もはじめて違和感に気付いた。

———あり? なんか、皆が俺のことを見てないか。

まるで時間が止まったかのように、俺の方に大量の視線が来ている。

え? なに、皆のその物欲しそうな目。

え? やだこれ、何これ。

……………解説しろと?

———いやいやいや!? 違うよな? そんな状況じゃねえよな!?

や、やめてよ? 知らないものは知らないよ俺。

根拠のないテキトーな事は言わない主義だからね? さっきのア
ルフオンス・ルートロクは例外としてさ!

「……」

「……」

……………え? だからなに、この間。

なんで敵まで止まってこっち見てるんだよ。知らないから、お前の

性能とか魔術適性とか。

つーなバレてたらマズイだろ？ バレてないから、片鱗も理解してないから。だから杖を振えよ、いや振るつちやダメだわそのままいで。

アルと特待生はさつさと逃げて。

「……………」

「……………」

——いいや逃げろやああああ!!!?

え？ なんなの、俺が言わないと始まらないの!?

俺が一回解説的ななんかコメント挟まないと駄目なの？ RPGなの!?! なんでもそんな空気読んでんの君達？ 読めてないから逃げろよさつさと!!

「……………」

「……………」

「……………な」

「な?」

「な、なんだありやあ……………!?!」

「!……………(ゴクリ)」

チクシヨウやってやらああああ!!

こうなりやペテンもやむを得ないぜ!!

……………しかし改めてなんだこの状況。

それっぽくやったら、なんか凄く期待度があがってやがる!

誰だ今生睡飲んだ奴、普通に遅いだろタイミング狙いすぎだろ。

く、くそお。どうすればいいんだっ。

……………とりあえず、魔術の威力を増幅させている杖に関して言ってみるか？ 大体外れないだろ、魔術師にとつちやあ生命線だし。

「つ、杖の先端に魔力が異常な程に濃くなっていやがる!?! あんな濃

度の魔術を使われたらっ」

『使われたら……!!?』

「! へえ」

「使われたらどうなるんだ、ロレン!」

——どうなるんだろうね?

それ聞いちやう? いやそりやここまでいったら気になるよね。

つーか『ほう? やるじゃねえかお前』みたいな目で見ないでくれないかな魔女さん? 杖ずつと上に掲げてるけど。なに、お前余裕なの? それともバカなの? つかなに、適当に言ったけど当たったの?

「……………つ、使われたら」

『……………』

「学院ごと、ここら一帯が焼け野原になる——かもしれぬ(小言)」

『な、なにいいいい!!?』

やつちやつたぜ(白目)

いや俺そんなの知らないからね? 何てピユアな奴等だよ。

つか教師陣どこいった——え? 多方向からの敵襲に反応して行っちゃったって? 残っている先生もなんかこっち見て驚いてるし。

——えつ、色々ヤバくね?

「意外ね……? まさか目覚めたばかりで加減を忘れていたとはいえ、一目でここまで私の魔術の威力を理解する人間がいるなんて」

「やめて待って、過大評価しないで魔女。偶然だから目を付けないで」

「ロレンは凄いんだぜ! お前の行動なんて全てお見通しだ!」

「だからやめろつて。つーかそれどつちかと言えば俺がお前を持ち上げるときの台詞だから!」

「ふうん、ロレン……ね、覚えたわ」

「覚えてんじやねえ忘れる!! そして黙ってよ後々が怖いだろうが!! 杖叩き折るぞ!!」

すると、魔女の目が見開かれた。

「なんですつて……!? チツ、バレたなら仕方ないわね! そうよ!
この肉体は偽物……本体はこの杖なの! まさか名のある魔導師
ですら見破るのが難解な魔術を、学院の生徒ごときがここまで見破る
なんてね!! これはあの方に報告する必要があるわね!」

「人の話きいてんのかああ!!? どんな深読みだよ!! 誰だあの方つ
て……いや言わなくて良いですもうホント黙っててください!!」

すると、アルが覚悟を決めたように立ち上がった。

「そうだったのか! ならば心置きなく杖を破壊してこの騒動を止め
られる……!! 流石ロレンだぜ!!」

「なに……!? クソ! 見破られるとは思ってなかったわ、私はここ
でやられる訳にはいかないの! 私には復活する『魔王様』を補佐し
なくてはいけないのよ——ハッ!」

「——ハッ! じゃねえよバカなの!! バラすもなにもさつきから
自爆しかしてねえだろ!? つかアルなに闘おうとしてんのさつきと
逃げろや!」

「そんな真似は出来ない! 皆を見捨てるなんて!」

「ここにきて主人公属性やめて!!」

つかちやつかり凄じ情報来たよね?

え、魔王復活するの? そんでこの魔女(杖)は帰り次第アル達と
セットで俺を報告するつもりなの? 多分そんな流れだよねこれ。

——え、これももしかしなくてもヤバくない?

「……………っ!? ぐ、う!!」

すると、アルが唐突に苦悶の顔をして右手を抑え始めた。

「くっ、なんだ!! 右手が焼けるように熱い……………っ!? まるで魔力
が溢れ出てくる様だ——ロレン! 何なんだこれは!?!」

「……………えっ? 俺に聞くのそれ!」

「頼む! 解説してくれ!」

「相手と時と場所と場合も考えてくんない!?!」

……………いや、うん。

魔王の復活が近付くに乗じて祖先の力が甦ってパワーアップ的なあれじゃないの？ どれよ。

言わないよ？ もう、口は災いの元ってハッキリとわかったからね。知らないふりするからね？ 口に戸を立ててやる。

「……成程、そういうことだったのか！ 流石ロレンだぜ！ これなら勝機がある！」

「え——どゆこと、心読んだの？ ここぞとばかりに友情の深さが裏目に出たの!?!」

こじ開けられたんだけど俺の戸。

すると、魔女は杖を握りながら叫ぶ。

「ズルいわよ味方同士だけで隠し事なんて！ 私にも教えなさいよ！」

「ズルくねえよお前は黙っててよ頼むから!!」

「情報分析だけではなく、相手を口車に乗せて味方には無言で合図する。ロレンさん……貴方は、どこまで……!?!」

「やめてつつてんだろ特待生!?! どこまでもねえよ！ お先真つ暗だよ!!」

特待生はなんか尊敬っぽい眼差しを向けてくるし。いや普通に考えて？ 心読んだ親友は置いておいても自爆しかしてないからねあの魔女？

……改めてなんだこの空間？

常識人が俺しかいないじゃないか!?!

「ハッ！」

常識人……そうだ！ セナがいるじゃないか!!

この状況を打開する何かを！ 鶴の一声を！

「……………フン、なによ。アルはまだいいけど、ロレンまで。ぽっと出の特待生とばかり仲良くして……もう知らないから」

「——エッ？」

俺が視線を横に流すと、そこには指先で髪を弄りながら目を伏せ、

口を尖らせる友人の姿があった。

「あ、あれっ。セナ……セナさん？」

「ふん、なんですかオリマー君？ 私は今ジュース飲むのに忙しいから話しかけないでほしいんですけど？」

「え、あつ………はい、ごめんなさい」

【悲報】なんか知らん内に嫌われてて悲しい。

つか君も逃げろよ。チューチュー飲んでる場合じゃないでしょうよ。

つかツンツンしながらの飲み方可愛いなオイ。

………ナニコレ？ もしかしなくても俺孤立してね？

確かに解説ポジションは基本孤独だけど、なんか色々違くなね？

ちやつかり誰も逃げてないから沢山人いるけど、なんか一人じゃね

——いや何で誰も逃げてないんだよっ。

出られない為に結界でも張られてたの？ それとも時間でも止められてんの？ 違うよね？

………なんかこれ、もはや俺が行くところまで行かないと收拾つかなくなつてね？

先生達も来ないし。

いや確かにあるけどさ、身近な実力者と連絡とれなくて孤立して、最後辺りで出てくるの。

多分こねえな、これ（諦念）

これ俺が解説し尽くして、アルとか特待生がなんとかあの魔女を撃退しない限りは終わりが無い気がするんだよなあ。

………何故だ？

どうしてこうなったんだ？

調子に乗ったからか？ というか乗ってたか？

俺はただ、親友の恋路を応援したかっただけなのに——。

「………おっ、魔女」

「魔女ですって？ ああ、名乗ってなかったわね。いいわ、聡いあなたに敬意を評して名乗ってあげる！」

「待って、名乗らなくていいから！ 余計なことしないでいいから！」
「あたしの名前はドーロ・シー……かつて魔王様の幹部の一人として国を震え上がらせた女よ！」

「待ってって言うてるのが聞こえねえのかよその口の軽さに世界が震えるわ!!」

その言葉に、特待生は目を剥いた。

『ドーロ・ビー』……………!? まさか、私のおじいちゃんを……………!!」

「おい名前聞き間違えてんぞ?! ペラペラ喋ってたわりにたった今致命的な誤解生じてたぞ?!」

「フツ、フフフフ……………」

すると、特待生をマジマジと見て、ドーロさんは「へえ」意味深に嗤う。

「——ねえ、貴女は道端の石ころの一つなんてわざわざ覚えてるかしら?」

「き。き、さまあああ!!! 貴様のせいで巨乳好きが遺伝したことが発覚した父さんは色々開き直り過ぎて貧乳の母さんと離婚したんだあ!!」

「んじやお前もうドーロ・ビーじゃねえかつつ!!」

つーか理由くだらなっ!? それ父親が悪いだろ!?

奇跡的に会話が成立しちやっただよ！ 宿敵になっちゃったよ！

後々から誤解が解けて気まづくなるやつだよ!?

「ドーロ・ビー……………」

「あら? 思ったよりも早いわね、教師陣が来るわ……………流石に彼等を全員相手取るのは厳しいわね。まあ今回はお触りみたいなものだし……………思わぬ形で重要な情報も手に入れたし、手を引かせてもらうわ」

「待て、逃げるのか!? ドロビーー!」

誰よドロビーって。幻のポ○モンか。

「ええ、貴方に、貴女……………私が殺すと、きつと『あの方に』殺されて

しまうもの」

「あの方……だと？ 一体誰のことだ……？」

——いや魔王だろ。

もしくは本物のドロロー・ビーだよ。

なに今更『あの方』とか言つて隠してんのこの杖？

「ようやく、思い出したわ。貴方のその手、それに貴方達の関係もね」

「俺達の、関係？」

「あら？ まさか知らないの……？ あらあら、運命つて残酷なのね？」

クスクスと、意味深に嗤う魔女。

——何か、ちよつと考えれば見当付きそうだから考えるのやめようかな。

多分誰も得しないだろうし。俺から暴露する内容でも無さそうだし。すると彼女は二人にそう言つて後に、俺の方を見て更に嗤った。

「それに、光栄に思いなさい？ 貴方は特に警戒すべき人間の筆頭として魔王様に挙げておくから」

「——えっ？」

え？

『学院の生徒には知将がいる』……こんなところかしら？

「待つていらぬ。俺そんな凄くないんで、知将どころか恥将になるんで」

「謙虚なのね？ ますます気に入ったわ」

「ねえいつから俺の口は呪われたの？ なんなの？ なんで発言する度に嫌な方向にまっしぐらなの？」

「また会える日を楽しみにしているわ、じゃあね？ ロレン君」

そう言つて、魔女は黒い空間を造り出してそこから消えていった——多分現代ではなく古代に使われていた『次元魔術』だろうけど、正直語る元気はない。

「ロレン!! お前がいなかったらどうなっていた事か……ホント助かったぜ! 流石俺の親友だ!」

「その。ロレン、さん……？ 貴方に話したいことがあって、どうですか？ 助けてくれたお礼に食事でも——」

「っ待ちなさいよ特待生？ アンタ出会って直ぐの人を食事に誘うのかしら？ それに告白してくれた人の前で？ 随分軽率じゃないかしら？」

何故なら今、駆け寄ってきた皆からの熱がすごいからだ。

もはや、何も言えねえ。

きつとまだ俺に解説ポジションは早かったのかも知れないな……でも引き返せる雰囲気は完全にゼロだよこれ。

恋のキューピッドから一転、なんか敵の幹部の宿敵になってしまった。魔王にも目をつけられるかもしれない。

「……………ホント。どうして、こうなった？」

これからどうなるんだろう、俺の学院生活。

「まだまだ若い。が、やるじゃないか？ もしかすれば……………辿り着けるかもしれない」

「魔王は恐らく復活する……………世界が終わるかもしれないが、もしかしたら……………希望の星はまだ潰えていなかったのかもしれない」

——ねえ、なんか渋い声がバツチり聴こえてるんだけど。

誰だろう……………本物の解説ポジションの方かな？ だとしたらサボりすぎじゃね？

でもなんか、聞き覚えのある声な気がする。

生徒じゃなくて、なんかもつと身近な感じな。

「巡り巡られる災難の中で、全てを解説して魔王まで辿り着けるかもしれないな——我が息子よ」

いやお前親父かい。

二話

「手を貸してくれ！三人とも！」

「ハイ！」

「任せて！」

「ああ、行くんだアル！奴の弱点は頭だ!!」

「了解だロレン！俺が皆を救うんだ!!うおおおお!!」

「そうだ、駆けるアル！」

人々の期待を胸に！信頼を力に！強大な敵と闘うんだ！

そう、モブの俺は後ろでサポートするだけでいいんだ!!

「———という、現実逃避がしたくて仕方ありません」

「……………疲れてるな、ロレン君」

例の騒動から数日。

朝早くに登校した俺は、先生に相談していた。

ふう、と先生は顎を手で隠すように覆う。

授業の時もたまにするので、癖のような物なのだろうか。

「ロレン君。君はね、もう驚きすぎて私がゲロを吐くほどの功績を残しているんだ。狙ってやってないというのであれば、それはそれで才能を超えてもはや神の領域なのだよ」

「先生、でも俺は……………もう、解説したくないです!!」

「———正直、私も生徒である君の意思を尊重したい……………だが、だがね？学生でありながら魔王の復活という情報はおろか、ほぼ無血による幹部の撃退。君の意向で功績は学院に来たしあまり公にはしなかったけど、本来国単位の表彰ものなんだよこれ」

「いや相手が勝手に吐いてくれただけなんですけど。撃退っていつても俺なにもしてないんですけど」

「時間稼ぎしたろう？」

「誰も逃げなかったけどね!？」

俺は、思わず頭を抱える。

「もういやだあ!?!これ以上解説したら何起こるか分かんないですよ!?!既に俺普通に登校できてないし!?!家に何か出張ってるしい!」

「主に君の親友達と後輩だろう?どこで聞き付けたか知らないが少ないメディアやクラスメイトを追っ払ったろうに」

「にしても目が怖いんですよ!?!お陰で窓から出てきましたからね!」

「ああうん、それは流石にマズイかなと見に行ったら三人に殺意バンバンに睨まれてスルーアップレインボーしたお陰で私は『ゲロ先生』と呼ばれているのだがね?」

「吐いたんかい」

「吐いてない、スルーアップレインボーだ」

「いや吐きましたよね?綺麗にしようとしてもアダ名が汚すぎて誤魔化せてませんからね」

「優秀な生徒が多いんだよこのクラス、魔術師の千人に一人の逸材と言われる人材が二人いるし?無詠唱だって心得てる生徒がセナ君を含めて三人。私だってレインボーしたくてレインボーな訳じゃないんだよ?」

「とうとう略し始めましたね」

俺のツツコミをスルーして、先生は言った。

「諦めろロレン君。少なくとも君は既に魔王の幹部から目をつけられた身なんだ、勿論我々が守るが、恥ずかしい話守る力にも限界がある」

「先、生」

「それに最近、君の解説を聞かないと体がむずむずするんだよ」

「いや病院行ってくださいよ何ですかそれ怖い————というか聞いてたの?まさかあのスタジアムに残ってた教師アンタだったの!?!」

「本当に危険なら守るつもりだったが気が付いたら聞き入ってしまったてね………あと余談だが、他のクラスメイトも似た症状を起こしている者が多数いる」

「症状っていつちやったよこの人。今更だけどなにこの学院」

もはや俺の解説は病気の類いになっているらしい。

怖い————ってか中毒性あるの?俺の解説!?

俺が驚いていると、先生は立ち上がった。

「とにかくだ、先生が思うに君がやることは一つだ」
ポン、と俺の肩に手を置いた。

「カンストすればいいんだ——解説レベル」

「……………はい？」

「私も出来る限りサポートするから」

手伝ってくれるのは有りがたいんですけど？

すみません、解説レベルって言葉何処から聞きました？

——ええ、そこから勉強ですよハイ。

図書館の本読み終わる勢いだよもう。

「本とは、過去と今を繋ぎ未来へと渡す糸のような物……………細く、だけどその強い糸は切れない。永遠に学ぼうとする知識が、既存の知識の価値を超える宝物なのね」

本は本だよ糸じゃないよ。

図書委員の子が最近変な事を言い始めてます。

悟り開いちゃったのかな？この生徒も中々に変わった子だ。多分ヒロイン候補だ（失礼）

「また勉強か、先生も負けないようにしないと！割りとき真面目に！」
最近先生がライバル視してくるが気にしない。

余談だけど、一応魔術の練習もしている。

指導者はアルとセナと編入生——カーラという名前らしいんだけど、彼等がしてくれた。

当初は相談したケロイド先生だったんだけど、途中から「レインボオオオオ!!」と叫んで消えた。

多分三人になんかされた。

しかしそれでも全く一般人の枠を越えない俺よ。

悲しい本当、誰か才能ください。

そして、最近気になることがある。

どうやらまた、編入生が来るらしい。

モブな訳がないのはわかっているが、俺は首をかしげる。

これはちよつと珍しいパターンな気がした。

幹部を撃退して修行とかそんな感じかと思いきや、大したイベントなんて無かったと思う。

いや、多分俺の脳がそう言った物語に侵食されてるのか？この世界ではここが現実だしなあ。

——いやでもこのクラスに二人目が来る必要はないよな？他のクラスでいいよな。やっぱおかしいようん。

「話は聞いていると思うが、今回このクラスに編入生が来る。時期も時期だと思うが仲良くしてやりなさい……さ、入りたまえ」

さて、今回はどんな地雷が来るんだろうか。

「失礼します」

そう言つて入ってきたのは。

制服の上に黒いローブを纏った長い黒髪の女子生徒だった。その顔に、声に覚えがある。

「……………え？」

あれじゃん、ドロー・シーじゃん。

どこからどう見てもじゃん。

ちよつと若くなって、制服着ただけじゃん。

地雷どころか水爆来たじゃん。

「うお！スゲエ美人！」

え？

「彼氏いますか!？」

あれ？

え？待って……気づいてないの？

「——彼女、強いですね」

いや編入生？

そりゃ強いよ、魔王の幹部だもん。

つかなんで当たり前にこのクラスにいんの？

「間違いないな、あふれでる魔力……しかし、どつかで見たことある気がするなあ」

いやアル君？

そりや見たことあるよ、少し前だよ。

「ロレン……ちよつと編入生を見すぎよ？アルもだけど、視線はあまり気持ちのいいものじゃないわよ」

セナさんが不機嫌そうにそう言った。

なんかごめんさい。

でもさ？見るよね普通。

数日前に現れた敵がしれつと学院に来たんだよ？

——つかそれ出来るなら普通順番逆じゃね？

パターンのにはアルと親密になって、影では悪いことやってますよっていうのが何故かアルと仲のいい奴に丁度見られてバレて、死にたくなかったらとか脅しかけられて良心が揺さぶられながらも——
——的なあれじゃないの（早口）どれだよ。

つか、その被害者のポジション俺に回ってきそうだな。

編入生は多分無いだろうし、何だかんだ友達想いのセナだとむしろ「ここでアナタを倒せば問題解決ね？」とか男気のあること言ってるそう。

そして瀕死になるところをアルに発見されるか、それか賢いセナなら戦闘中になんか合図でもして気付かれない内に応援を呼ぶかも。

ちやつかり徒手格闘もできるから、アルと同じくらい強いしね。

……今更だけど親友を瀕死とかクズくね？発想。

話を戻そう、うん。

要するに彼女がもし本当にドロークシーならば、あまり効率がいい動きでは無いということだ。

前に、彼女は調査が目的だといっていた。

ならば生徒に扮して行えば多少怪しまれても問題ないはず、何か出来ない理由でもあったのだろうか。

ただのミスとか言われても、コイツならあり得そうなんだけど。

——もしかして本当に似てるだけなのかな？

なんかそんな気もしてきたな。

皆も見覚えがないか似てる？位の感想しか抱いてないみたいだし。俺が敏感になりすぎてるだけかも。

だとしたら恥ずかしいな、反省反省。

「じゃあ君、名乗りなさい」

「ドーロ・ビーです」

「いやそれ一番名乗っちゃいかんやつ!!」

「ん……？何処かで聞いたような名だな？」

「うっそだろオイ!!いや敵だよね!!間違えに間違えた挙げ句ドロビーって名付けた敵だよね!!」

「てき？・ロレンさんの恋敵ですか？」

「いつから脳ミソラブコメになった編入生!!恋もなにも今まで春すら来てねえよ言わせないで!!というかお前が一番に反応するべきなんじゃないのこの状況!!」

すると、編入生カーラはクスクスと笑った。

「もう、何をいつてるんですか？私の敵はドロロ・ビーですよ？彼女とは似てもにつきませんよお」

「いや並べ替えれば直ぐだよ？顔も名前も姉妹レベルに似てるよ？まあ人違いなんだけど、むしろ何で聞き間違いで定着してる癖にここでは聞き間違えないの!!」

ちなみに、本来なら名前はドーロ・シーである。

ビーさんとちよつと混ざってるかな？位のネーミングときた、明らかに隠す気がないと思われる。

……いや。あるけど、変装したりして偽名を名乗る時にちやつかりヒントみたいに前の名前の印象残す時。まさかそれか？その現象か？

でも明らかに寄せすぎだよねこれ。

そして、なんやかんや一番迷惑を被っているのはドロー・ビーさんだからね？

顔も見たことないけどそろそろ同情しちゃうよ俺。

「それに、ほら。あの杖はもつとオバサン臭かったじゃないですか」

「おぼつ……………コロしてやる」

「今完全に反応したよね!?聞こえた?」

「?」

「もう皆揃って耳鼻科行け!もしくは頭の!俺もついていくから!!」

「……………随分と新しい編入生にご執心ね?」

「ヒエ」

セナに怖い顔されたんで、俺は口を閉じることにした。

ちなみに彼女の席は俺の後ろ側。

通り過ぎ様に彼女は意味深に、俺に微笑んできた。

それによってセナの視線が物理的にいたくなっただけだ。

余談というか解説なのだが、

自分以外の他人になる魔法には何個か種類があつたりする。

その手の業界では、人間の体を一つの『設計図』として考えるらしい。

目の錯覚を利用する魔法。

禁忌の枠には体そのものを対象通りに作り替える魔法。そして自体の存在を『無くして』自由に変身する魔法もある。

最初の魔法以外はひよひよいと出来る魔法ではないし、別な生物になるという想像力と精密な計りがものをいう世界だ。

精神が崩壊する何て言う恐ろしい話もある。

故に、自ずと自分と似てれば似てる程『やりやすい』くなるので、確かに目の前のソイツの容姿は効率的には見えるのだが。

元々杖なので、正直これに当てはまるかすらわからない。

とりあえず、わかることはひとつ。

——もう、隠すつもり無いでしょこの杖。

『なんか、体が軽くなった?』

『痒いのが収まったぜ……?』

あと、解説したことでクラスメイトの発作が収まりました。

「お前、何のつもりだよ」

「何の話ですか? ロレン君」

彼女を屋上に呼び出しました。

「バレバレなんだよ。サングラスとか仮面とかマント程度で変装完了とか言ってるレベルにバレバレなんだよ」

すると、彼女は口を裂いて笑った。

「……見事、ね。流石私が褒めただけの人材、驚嘆な値するわ」

「むしろ騙せると思った事に驚嘆なんだけど」

「それで、何が目的なんだよ?」

「まさか? 観察対象として貴方を見る事にしたのよ。ついでにあの二人もね」

あ、普通に話してくれるのね。

つか、それ逆じゃね? 普通ならあの二人で、まあ仲良いから俺もチェックしておくか位だよな。

「でも、悪いこと言わないからチェンジしてこいよ。既にボロ出しまくってるし魔王様の情報だだ漏れになるぞこれ」

「あら? 舐められたものね、これでも口は堅いのよ?」

「お前それ本気で言ってる? 空気より軽くて綿より柔らかいぞお前の口」

何で俺アドバイスしてるんだろうと思いつつながら、諭すように言っているのだが。

「あらあら、この私が魔王城の位置とか言うんでも? 南東の海底で今は体を休めていることを言うんでも?」

「おーい出てんぞ、言った側から出てんぞ」

「——ハッ!？」

「このリアクションに慣れた事が悲しい」

彼女は目を丸くして「やられた!」とばかりに驚くが、正直俺は呆

れた顔をする。

「……………にしても、いいのかしら?」

「んあ?」

「一応、観察対象なのは事実だけど。殺すな、とは言われてないのよ?」

「っ」

「ここには私と貴方の二人きり。絶好のチャンスだと思わない? 知将にしては随分なミスリードをしたわね?」

彼女は不敵に笑う。

だが、その顔は直ぐに曇った。

「何故、笑っているのかしら?」

俺も、笑っていたからだ。

「知将になったつもりは無いけど……………俺だつてむぎむぎ二人きりの場所で正体をバラそうなんて思っちゃいけないぜ」

「……………何ですつて?」

「先生!お願いします!!」

俺がそう叫ぶと、屋上の扉が開いてケロイド先生が現れて。

「なっ!?!」

「ハッハッハ! 自爆したな魔女め! まさか無力な俺が本当に一人で前と対面すると思つたのか!」

「くっ」

彼女は苦汁を飲んだような顔をするが、既に遅い。

ケロイド先生は俺のサポートをしてくれるという約束のもと、待機してもらっていたんだ。

「先生、やっちゃってください!」

「任せたまえ」

先生は大きく息を吸い。

そして、叫んだ。

「——なに!?! 知っているのかロレン君!?!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え?」

「え?」

いや、え?!

「先生?何言ってるんですか?」

「ん?サポートすると言わなかったかね?より君の解説が際立つ様に」

……………。

「いやそつちいいい?!?!普通に学院生活をサポートしてよ?!状況を理解してよ!!」

「知ってるのかいロレン君!」

「むしろ知らないのかよ!」

なんだこの緊張感の無さ。

……………すぐく嫌な予感してきた。

「——先生、まさか話聞いてなかったんですか?」

すると、先生は緩慢とした笑みを浮かべる。

「勿論。ウブな男女生徒二人が人気無いところに集まってする事なんて、普通の先生ならば注意するが行きすぎなければ大丈夫だと考えているこの私は違う——つまり全く聞いてなかった!!」

「いっそ魔王側についてやろうか?」

「歓迎するわよ!」

「オメーも今の立場理解してる!」

「なに、知ってるのかいロレン君!」

「コントでもしてんの!」

うん、冗談でもやめよ。闇落ちしてもなんか足引つ張られそう、目の前の奴に。

「危なかつたわ、私の正体が魔王様の手下だとバレるところだったじゃない」

「流れるように自爆するよねお前本当に」

「フン！いいかしら？私の正体をバラそうものならこの学院にいる子達がどうなるか………聡い貴方ならわかるでしょう？」

「ここに教師いるんだけど」

「私教師なんだが」

「フツ——ノーカーンよ！」

「お前自分に甘すぎない？」

「仕方ない、新入生だからな。勝手にわからないこともあるだろう」

「ゲロ先生、脳内ゲロに侵食されてませんか？」

うんうんと首肯く教師に、俺は思わず言ってしまった。

しかしなんだろう、許されていいと思う。

むしろブチキレても問題ないと思う。

「フン！私の偽装と隠蔽は完璧のようね」

「お前なんなの？他人の優しさと難聴で持ち上げられているお前なんなの？長い眠りに付きすぎて脳ミソ腐ったの？それとも最初から中身無いの？」

「失礼ね、聡い貴方が例外なのよ」

「そんなことないよ、お前実は元からアホの子なんだよ」

「ふん、賢い人は皆そう言うわ」

「それちやつかり自分は賢くないって自白してるからね？」

確かに俺自身、結構面倒くさい性格だなどは思ってるけどさ？

でも、でもよ？流石にアホすぎない？

俺も元々はバカだし今も勉強しないとアホだけどアホじゃない？

アホ言い過ぎて更にアホになりそう。

「でもまあ、私がやろうと思えばここら消し炭にできるからね。どちらにせよ、黙っている方が得なんじゃないかしら？」

確かに力があるのは間違いない。

ただまあ、何とかできそうな気もしないでもないが。

彼女は俺を見て、穏やかに笑う。

「まあ、悪いようにはしないわよ。ロレン君？これからの学院生活よろしくね？」

「……正気か？よろしくする気なの？」

ええ、と笑う彼女に。少しばかりドキリとした自分がいた。

敵の幹部だし杖なのに……やはり俺のアホは中々に抜けないらしい。

「沢山教えてもらうから覚悟することね？」

「知るか！覚悟なんかしないからな！」

「ならさつきから彼処にいる三人組は放つてもいいのかしら？」

「……ロレンさん？私の食事は断つたのに、ズルくないですかあ？」

「……編入生の、分際でええ」

「先生、俺のポジションとりやがりましたねえ……！」

「……ナニアレ」

「多分覚悟決めないと、死ぬわね」

「レインボオロロロ!!!」

前門の魔王の幹部（阿呆）、後門の勇者達（疑問）。

そしてアルの殺意に当てられて横でレインボーしてる先生。

誰か、この状況カオスを正しく解説してください。